

RUBeC 演習を終えて

清水 吉大

Yoshihiro SHIMIZU

物質化学専攻修士課程 1年

1. はじめに

2016年8月13日から29日の約二週間、アメリカ合衆国カリフォルニア州バークレー市にある Jodo Shinshu Center の中にある龍谷大学の北米拠点 Ryukoku University Berkeley Center で「RUBeC 演習 I」を受講した。

本演習ではテクニカルライティングとプレゼンテーションの講義があり、英語を用いた一枚要旨の作成、相手に伝わりやすいプレゼンテーションの仕方について学習した。

また、サンタローザにある Thermal Technology 社を訪問・見学し、その会社の特色などを学んだ。さらに UC Davis 校にも訪問し、海外の大学における研究室を見学した。

2. RUBeC 演習に参加した理由

私が RUBeC 演習に参加したのは英語能力を向上させるとともに、アメリカ社会、アメリカ文化を実際に自分の肌で触れるためである。やはり、研究活動を行っていく上で、グローバルな視点を持つことは大事であると考えている。その視点を持つファーストステップとして本演習で経験を積みたいと思い、参加した。

3. 講義内容

RUBeC 演習での講義は2週間のうち、月、火、木、金の午前(9:00-11:30)にテクニカルライティング、午後(13:00-15:00)にプレゼンテーションスキルがあった。

テクニカルライティングの講義では英語の文章の書き方や規則などを学習した。特に日本人になじみのない「a」「an」「the」の冠詞について、また理論

的に文章を書き進めるための接続詞について学習した。実際に自分で書いた文章に対しても、きめ細やかな指導をしていただき、特に前述の項目については理解を深めることができた。さらに事前にかけていた自分の研究について一枚要旨についても、講義内容を踏まえ、各講義後に校正し、添削を受けて完成させた。最終日にはこの一枚要旨を用いて、クラスメイトに対して互いに英語で発表を行った。お互いに専門分野ではないにも関わらず、できるだけ伝わるようにと考えて発表したことは、これからの研究活動発表で役立つと思う。

プレゼンテーションスキルの講義では、英語の話し方、スライドの作成について学習した。英語の話し方では、発音はもちろんのこと、アクセントの位置や音節、イントネーション、アイコンタクト、ジェスチャーの方法、文章中の単語で最も強く読む Word Stress について学習した。中でも自分の研究内容で用いる単語、特に元素名が難しいことを痛感した。スライド作成については、相手に伝わりやすいスライド、具体的には多くの情報を記載するのではなく必要な情報をシンプルに掲載するということを教えていただいた。

これらの話し方やスライドの作り方を学習した上で、最終日のプレゼンテーションでは自分の研究内容について発表を行った。初めての英語での研究発表ということもあり、早口になってしまった。しかし担当していただいた講師からは「発音はまだまだではあるものの、Word Stress やジェスチャー、アイコンタクトなどは完璧でわかりやすく、とても良かった。」という講評をいただき、今回の RUBeC 演習で英語力が向上できたと感じた。

4. 企業及び大学訪問について

RUBeC 演習では水曜日に企業や大学に訪問した。一週目の水曜日には Thermal Technology 社を訪問した。この企業は焼結にかかわる「高温炉」「SPS (Spark Plasma Sintering: 放電プラズマ焼結) 装置」を主に取り扱っている企業である。またこの企業で

は大型部品、黒鉛製部品を除いたネジなどはすべて自社で製造している。SPS 装置の開発では水冷の水圧などを専門に扱う社員、電気系統を専門で扱う社員がそれぞれの部分を担当して、一つの装置として完成させている。このように、一つの製品を複数のプロフェッショナルが集まって作製しているところは、日本の中小企業が職人技で各パーツを作製し、それらを組み立てているところに通じると感じた。

二週目の水曜日では UC Davis に訪問した。UC Davis は 10 校あるカリフォルニア大学のひとつである。Davis はシリコンバレー、San Francisco, Napa, Lake Tahoe, Yosemite, Sacramento へのロケーションが良く、それぞれ研究活動に活かされている。UC Davis 工学部についての説明を受けた後、Geotechnical Modeling Facility に訪問した。この施設では地中に埋めて用いる装置の模型を作製し、半径 9 m を越す巨大な遠心分離機を用いることで、地中でどんな応力が生じるのかということを解明する施設である。この規模の実験装置を日本ではなかなか所有することは難しく、たとえ所有できたとしても、コスト面で実験することは難しいだろう。このように規模の大きな実験を行ったしまえるのもアメリカの大学だからこそなのかもしれないと感じ

た。

5. アメリカでの生活について

今回の RUBeC 演習は初めての海外経験であった。そのため、アメリカに着いたころには、レストランで注文するのも苦勞した。しかし、講義を受ける他にも、ホストファミリーとの会話、スーパーでの買い物、その他いろいろな現地の生活でネイティブの英語を耳にすること、英語で返答をすることを通して、少しだけではあるが、英語に慣れていた。やはり、日本で生活していただけでは習得できない部分をアメリカで少しだけでも習得できたことは、RUBeC 演習に参加して良かったことであつたと感じた。

6. おわりに

RUBeC 演習で短期ではあるが、留学をし、日常生活でのコミュニケーションや文化、講義で習った英語で相手に伝えるプレゼンテーションを習得できた。このことは、私にとって大きな経験となった。今後の研究活動をグローバルに活躍することができ、非常に有意義な体験であつたと思う。